

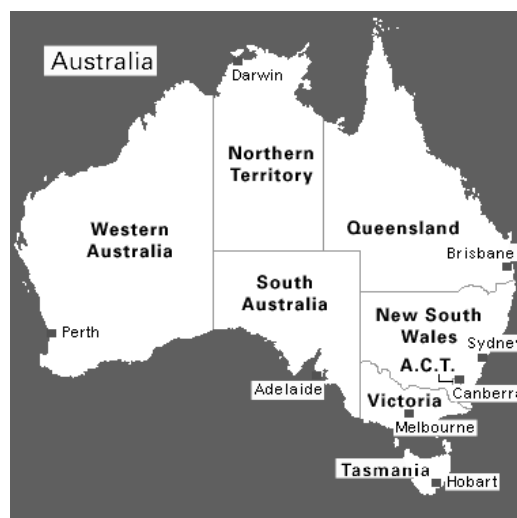
## 資料

- 資料 1 オーストラリアおよびクイーンズランド州の基礎情報
- 資料 2 オーストラリアの教育制度
- 資料 3 オーストラリアの主要教員養成機関と学生数（2008年）
- 資料 4 クイーンズランド州の「教職専門性スタンダード」（2007年版）
- 資料 5 クイーンズランド州の「教職専門性スタンダード」（2002年版）
- 資料 6 クイーンズランド工科大学 2003年版スタンダード
- 資料 7 クイーンズランド工科大学 2005年版スタンダード
- 資料 8 ジェームズ・クック大学のスタンダード
- 資料 9 各行政区における都市部・農村部・遠隔地域の州立学校数（2006年）
- 資料 10 学生の履修事例

資料1 オーストラリアおよびクイーンズランド州の基本情報（2009年現在）

オーストラリアの概要	
国名	オーストラリア
首都	キャンベラ
面積	7,602,024km <sup>2</sup>
人口	21,874,000 人
政治体制	立憲君主制
元首	エリザベス女王 (英国女王) 連邦総督 (Governor General) が代行
連邦議会	二院制[上院・下院]
通貨	オーストラリアドル(A\$)
公用語	英語

出所：Australian Bureau of Statistics



出所：National Library of Australia

<http://www.nla.gov.au/libraries/map.html>

各州の概要			
州名	州都	面積 (km <sup>2</sup> )	人口(千人)
ニューサウスウェールズ(NSW)	シドニー	800,642	7,099
ビクトリア (VIC)	メルボルン	227,416	5,427
クイーンズランド(QLD)	ブリスベン	1,730,648	4,406
南オーストラリア(SA)	アデレード	983,482	1,622
西オーストラリア(WA)	パース	2,529,875	2,236
タスマニア(TAS)	ホバート	68,401	502
北部準州(NT)	ダーウィン	1,349,129	361
首都直轄区(ACT)	キャンベラ	2,358	224

出所：Australian Bureau of Statistics

クイーンズランド州の概要	
州議会	一院制 (他の州は二院制)
州首相	Anna Bligh (労働党)
州総督	Penelope Wensley
地方行政区	10 (右の地図)
地理	南北 2,100km 東西 1,450km 海岸線 7,400 km
気候	熱帯雨林気候 (北部) 亜熱帯気候 (南部)



出所：<http://www.pictureqld.slq.qld.gov.au/home/find/place>

資料 2 オーストラリアの教育制度

【高等教育】

大 学	大 学 院	取得できる学位・資格	
		博士号	
		修士号	
		優等学位 (オナーズ)	グラデュエート・ディプロマ グラデュエート・サーティフィケート
	学 部	学士 (バチエラー)	
		準学士	アドバンス・ディプロマ ディプロマ

職 業 訓 練 専 門 学 校	取得できる資格
	職業グラデュエート・ディプロマ
	職業グラデュエート・サーティフィケート
	アドバンス・ディプロマ
	ディプロマ
	サーティフィケート 4
	サーティフィケート 3
	サーティフィケート 2
サーティフィケート 1	



【初等・中等教育】

義 務 教 育	17	12	後期中等教育	後期中等教育	特 別 学 校				
	16	11							
	15	10	前期中等教育	前期中等教育					
	14	9							
	13	8							
	12	7	初等教育	初等教育					
	11	6							
	10	5							
	9	4							
	8	3							
	7	2							
	6	1	就学前教育	就学前教育					
	5	1							
年齢	学年								
	州	NSW	VIC	TAS	ACT	SA	NT	WA	QLD

出典: Australian Government(Australian Education International) (2008) *Study in Australia* により筆者作成。

(1) 就学前教育

いずれの州でも 3 歳から 5 歳の幼児を対象とした就学前教育が実施されており、保護者の希望により週 2 日から 5 日、1 日に 2, 3 時間程度、幼稚園(kindergarten)やプレ・スクール(pre-school)と呼ばれる教育機関で行われる。初等学校入学前の 5 歳児に対しては通常 1 年間の準備教育も行われているが、その名称はニューサウスウェールズ州と首都直轄区では「キンダーガートン」(Kindergarten)、ビクトリア州とタスマニア州は「プレパラトリー」(preparatory)、西オーストラリア州は「プレ・プライマリー」、南オーストラリア州は「レセプション」、北部準州「トランジション」、クイーンズランド州は「プレ・スクール」と呼ばれている。準備教育には就学義務はないが、初等・中等教育と連結した教育が行われており、就学前教育の重要性を認識するオーストラリア政府は準備教育への就学を奨励し

ている。さらに、地域には保育を必要とする家庭のために、私的な保育所(child care center)も多数設置されている。

## (2) 初等・中等教育

初等・中等学校は、公立学校(government school)と私立学校(non-government school)に大別される。公立学校はほとんどが州立学校であり、全体の約 70%を占めている。私立学校には、カトリック系の学校と独立系の学校 (independent school)がある。ほとんどの学校では総合的な(comprehensive)教育が行われており、外国語教育や職業教育などの専門教育のみを行う学校はないが、障害を有する生徒のための特別学校(special schools)は設置されている。州立学校は男女共学が一般的であるが、私立学校や一部の州立学校では別学も実施されている。

初等・中等教育の修業年限はいずれの州も 12 年間であるが、両者の区分は 6-6 制としている州と 7-5 制としている州がある。義務教育は学年ではなく年齢で定められており、州によって 5 歳あるいは 6 歳で就学し、15 歳から 16 歳で修了する。就学開始年齢は 6 歳に達する月を基準として決められているが、月の設定が州ごとに異なるため、州が違っても同じ学年であっても一年近い年齢差が生じることがある。しかし、こうした違いは、初等学校および中等学校それぞれの修業年数も含めて、今後すべての州で統一される予定である。

初等教育と中等教育は別学で実施されるが、一貫校も存在する。また、中等教育は前期中等教育段階 (3 年間または 4 年間) と後期中等教育段階 (2 年間) から成るが、タスマニア州を除くと両者を一貫して行う学校が多い。なお、義務教育期間が年齢によって定められているため、学年の途中でも義務教育修了年齢に達した時点で退学する生徒がわずかであるが存在する。第 10 学年修了時には前期中等教育修了証書が授与され、これは後期中等教育段階への進学や専門学校への進学、就職などのための資格証書として使用されている。

第 11 学年および第 12 学年の後期中等教育段階は、高等教育進学への準備段階と位置づけられており、将来の進路に合わせた科目を選択して履修するのが一般的である。すなわち、後期中等教育では大学で専攻する分野の基礎を学習するという意味合いが強い。第 12 学年修了時には後期中等教育修了証書が付与されるが、修了のための条件や評価方法、修了証書の名称などは州によって異なる。また、第 12 学年では高等教育進学のための統一試験が実施されている。ただし、実施時期や方法、内容なども州ごとに異なる。

## (3) 高等教育

高等教育機関には、学術的な研究を行う大学のほかに職業訓練を行う公立の技術継続職業機関(Technical and Further Education: TAFE)や私立の専門学校がある。2008 年現在、大学は全国に 40 校あるが、37 校が各州の法律に基づいて設立、運営される州立大学である。州立大学は、予算については連邦政府の管轄であるが、設立と運営その他は州政府が管轄しているため、国立大学と州立大学の両方の要素を合わせ持っている。たとえば、クイーンズランド州の場合、「高等教育 (一般規定) 法」(Higher Education Act 2008)が州内の大学を規定する法律であるが、予算は連邦政府の「高等教育支援法」(Higher Education Support Act 2003)に基づいて施行されている。

大学は、シドニー大学やメルボルン大学など歴史の長い伝統的の大学と、1980 年代の高等

教育改革以降に設立された新大学(new universities)とがある。前者は、学術研究が盛んであり、モナシュ大学、ニューサウスウェールズ大学、クイーンズランド大学、西オーストラリア大学、アデレード大学、オーストラリア国立大学とともに「8大学」(Group of Eight)と呼ばれるグループを構成している。後者は、かつての高等教育カレッジ(College of Advanced Education)が大学に吸収合併されたり、カレッジ間の統合により設立されたりしており、地域と結びついた実務的な教育に重点が置かれている。

学部課程では通常3年間で学士号が取得できるが、専攻分野によっては4年以上必要な場合もある。学士コースのほか、2年間で準学士を取得するコースや、ディプロマやサーティフィケートなどの資格を取得するコースもある。学士コースを優秀な成績で修了すると(場合によっては学士コースの途中から)、オナーズ(Honours)と呼ばれる一年間の専門研究コースに進むことができ、修了時には優等学位が取得できる。さらに、オナーズの成績によっては、修士課程を経ずに博士課程に進学することもできる。修士課程には研究論文を提出する「リサーチコース」と、講義履修、試験、実習等を組み合わせた「コースワーク」があり在籍期間は通常1~2年である。博士課程は3年以上で、高度な専門研究を行い、学術論文を完成する。

資料3 オーストラリアの主要教員養成機関と学生数 (2008年)

(単位:人)

	大学名	設立	男	女	計
、	Australian College of Physical Education	1917	396	374	769
	Avondale College	1892	148	339	487
	Charles Sturt University	1990	910	3393	4,303
	Macquarie University	1964	351	1948	2,299
	Southern Cross University	1994	475	890	1,365
	The University of New England	1954	686	2643	3,329
	The University of New South Wales	1949	262	638	900
	The University of Newcastle	1965	1,058	2,992	4,050
	The University of Sydney	1850	456	1,400	1,858
	University of Technology, Sydney	1989	266	773	1,039
	University of Western Sydney	1989	374	1,182	1,556
	University of Wollongong	1975	317	1,091	1,408
	Wesley Institute	1983	36	52	88
VIC	Deakin University	1974	778	2,478	3,256
	La Trobe University	1964	479	1,115	1,594
	Monash University	1958	525	1,599	2,124
	RMIT University	1992	163	583	746
	The University of Melbourne	1853	276	1,431	1,707
	University of Ballarat	1994	377	723	1,100
	Victoria University	1990	319	1,031	1,350
QLD	Central Queensland University	1992	248	956	1,204
	Christian Heritage College	1986	50	168	218
	Griffith University	1971	885	2,345	3,230
	James Cook University	1970	227	1,156	1,383
	Queensland University of Technology	1989	715	2,251	2,966
	The University of Queensland	1909	216	537	753
	University of Southern Queensland	1994	487	1,659	2,146
	University of the Sunshine Coast	1995	246	655	901
WA	Curtin University of Technology	1987	112	818	930
	Edith Cowan University	1991	785	2,744	3,529
	Murdoch University	1973	310	1,495	1,805
	The University of Notre Dame Australia	1990	286	1,311	1,597
	The University of Western Australia	1911	100	259	359
SA	Tabor College Adelaide	1979	61	120	181
	The Flinders University of South Australia	1966	457	1,111	1,568
	The University of Adelaide	1874	169	290	459
	University of South Australia	1991	612	2,142	2,754
TAS	University of Tasmania	1890	222	743	965
NT	Batchelor Institute of Indigenous Tertiary Education	1999	0	0	0
	Charles Darwin University	1989	189	709	898
ACT	University of Canberra	1990	263	742	1,005
複数州	Australian Catholic University	1991	850	3,047	3,897
総数	2008年総数		16,146	51,942	68,088
	2007年総数		17,088	51,671	68,759

出典: DEEWR (2009) *Students 2008: Selected Higher Education Statistics* により筆者作成。

資料4 クイーンズランド州の「教職専門性スタンダード」(2007年版)

スタンダード1	個人や集団の興味を引きつける柔軟な学習を構成し、実施する。
知識	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 教科の教授内容、学習の流れ、技能および教科間のつながり</li> <li>・ 社会的、文化的、歴史的に構築された知識の特質</li> <li>・ 学習目標の認識方法</li> <li>・ 授業計画</li> <li>・ カリキュラムの枠組みや、学校、行政当局、採用機関の政策</li> <li>・ 生徒の学習方法についての知識と、それを応用する力</li> <li>・ 学習計画のために生徒の情報を収集し、それを活用する方法</li> <li>・ 教授・学習、評価の方法、資料、技術について知り、それらの価値を評価し、適切なものを選択する。</li> <li>・ 情報通信技術を組み込んだ効果的な教授・学習、評価方法。</li> <li>・ 障害、学習困難、英才など特別なニーズを含めた、すべての生徒の学習ニーズ</li> <li>・ カリキュラムを計画し、適切に処理し、実施し、実施された学習を評価する技術</li> </ul>
実践力	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ カリキュラムの枠組みや政策を反映した学習目標を設定し、学習計画をたてる。</li> <li>・ 学習目標と学習計画を生徒や保護者に通知する方法を熟知する。</li> <li>・ 学習目標、カリキュラム、生徒の学習ニーズ、興味、学習スタイルを明確にし、それらに適した教授・学習方法や教材を選択して、活用する。</li> <li>・ 個人および集団に対して教授・学習、評価、態度・行動の指導を柔軟に行うための方法を認識し、それを適用する。</li> <li>・ 情報通信技術を含んだ教授・学習や評価の方法について知り、それを活用する。</li> <li>・ 学習活動を評価するための幅広い情報を収集し、それらを教授・学習や評価、教材の改善に役立てる。</li> </ul>
価値	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 青少年を含むあらゆる年齢の学習者に対応する。</li> <li>・ すべての生徒の学びを信頼し、成功を促すための支援を行う。</li> <li>・ 学習への興味を示し、生涯学習者としてのモデルを示す。</li> <li>・ ICT と学習を統合させる。</li> </ul>

スタンダード 2	言語、リテラシー、ニューメラシーの能力を向上させる学習を構成し、実施する。
知識	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 学習や日常の場面における言語、リテラシー、ニューメラシーの広範な特質</li> <li>・ 言語、リテラシー、ニューメラシーの技能向上に関する根拠に基づいた最新の理論</li> <li>・ 言語、リテラシー、ニューメラシーに関する政策の認識</li> <li>・ カリキュラムにおいて必要とされる言語、リテラシー、ニューメラシーと、学校やコミュニティにおいてこれらを学習する機会を認識する技能</li> <li>・ 生徒の言語、リテラシー、ニューメラシーの向上に関する情報収集と、向上を判断するための評価方法</li> <li>・ 言語、リテラシー、ニューメラシーの向上</li> <li>・ 様々なテキストの言語様式と、その特徴や構造</li> <li>・ 数学の応用と課題解決</li> <li>・ 異なるコミュニケーションの方法、社会的、文化的、歴史的な文脈が言語選択や実践に及ぼす影響</li> <li>・ 教授分野や、異なる文脈の中で、言語、リテラシー、ニューメラシーの技能向上を助ける様々な方法や資料</li> <li>・ 言語、リテラシー、ニューメラシーの向上のための ICT の効果</li> <li>・ 生徒の言語、リテラシー、ニューメラシーのニーズ（ESL のニーズを含む）を把握して、その能力を評価し、適切な介入および支援の方法</li> <li>・ 言語、リテラシー、ニューメラシーの教授技能を向上させる必要性や、技能の検討方法</li> </ul>
実践力	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ カリキュラム分野において必要とされる言語、リテラシー、ニューメラシーを認識する</li> <li>・ 生徒の言語、リテラシー、ニューメラシーの技能に関する情報を収集し、それらを学習計画や実施のために活用する。</li> <li>・ 生徒が多様な文脈の中で言語、リテラシー、ニューメラシーの能力を効果的に発揮できるように授業を行う</li> <li>・ 生徒が言語、リテラシー、ニューメラシーの技能を向上させ、それを支援するための教授・学習方法と教材を見つけ、それを適用する。</li> <li>・ 生徒の言語、リテラシー、ニューメラシーの技能を観察して評価し、学習プログラムの計画、保護者への通知、指導方法や資料の見直しなどにおいてそれを活用する。</li> <li>・ カリキュラム領域における個人の言語、リテラシー、ニューメラシーの技能や能力を評価し、必要に応じて教育活動の中で改善する。</li> </ul>
価値	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ すべての生徒の言語、リテラシー、ニューメラシーの発達に高い期待を示す。</li> <li>・ 生徒の言語、リテラシー、ニューメラシーを発達させることは、教員の義務であることを認識する。</li> <li>・ 効果的なスキルのモデルを示し、教員自身の言語、リテラシー、ニューメラシーのスキルとそれらの教授技術を向上させる。</li> <li>・ リテラシーやニューメラシーを教室活動に統合させる。</li> </ul>



スタンダード 3		知的興味・関心を高める学習を構成し、実施する。
知識	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 教授分野の中核となる概念、探求モデルとその構造</li> <li>・ 知識の本質と、それが生成され、応用され、再建される方法</li> <li>・ 生徒を支援する方法</li> <li>・ 教科やカリキュラム分野におけるレベルの高い思考、想像力、創造性</li> <li>・ 知的リスクへの挑戦、省察と問題解決を促す教授・学習方法</li> <li>・ 教科分野および生徒の学習段階に応じたカリキュラムの枠組み</li> <li>・ 知識の構築を促す探求学習などの教授方法</li> <li>・ 個人および小集団での探求を支援する方法</li> <li>・ 意図的に ICT を活用した教授・学習</li> <li>・ 価値の分析方法</li> </ul>	
実践力	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ スキャホールディングの技術を活用し、生徒が学習目標を達成して、自らの学習に対して責任を持てるように支援する。</li> <li>・ 知的で、取り組む価値のある題材や問題に生徒を挑戦させる方法を認識する。</li> <li>・ 多様な考えや意見が尊重され、疑問を呈したり、意見を述べたりすることが奨励されるような環境を設定する。</li> <li>・ 生徒が積極的に ICT を活用して、新たな知識にアクセスし、これを体系づけ、探求し、解釈し、分析し、創造し、さらにそれを伝達し、説明する学習経験を計画し、実施する。</li> <li>・ レベルの高い思考を含んだ教授活動を行う。</li> <li>・ 生徒が課題を探求するための方法を認識し、その適用方法を知る。</li> <li>・ 生徒の自信や、探求される課題の概念に対する精通度にふさわしい指導を行う。</li> <li>・ 生徒に批判的内省を促す方法を認識してそれを適用し、生徒が何をどのように学習しているのか検討し、その結果を新たな理解につなげる。</li> </ul>	
価値	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 生徒が自らの学習目標を明確にし、レベルの高い目標を達成するための支援をする。</li> <li>・ 創造性、創造力を高め、知的挑戦を促す。</li> <li>・ 生徒中心の学習を促し、批判的思考、自立的な問題解決能力を向上させる。</li> <li>・ 新時代のデジタル技術を取り入れ、21 世紀の学習にふさわしい教授活動を行う。</li> </ul>	

スタンダード 4		多様性を尊重する学習を構成し、実施する。
知識	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 教授・学習に関する根拠に基づいた理論と研究</li> <li>・ 社会経済的状況、ジェンダー、民族的背景、言語、宗教や信条、特別なニーズなどの要因が個人の世界観に及ぼす影響</li> <li>・ オーストラリア先住民の文化と歴史</li> <li>・ 学校および採用機関の多様性に関わる政策</li> <li>・ 障害、学習困難、英才に関わる特別なニーズを含めた個々の学習ニーズ とその支援</li> <li>・ 先住民生徒に対する高い期待と、彼らの学業達成を促す教授方法</li> <li>・ 生徒の学習機会を向上させ、個々の学習ニーズに対応するための ICT の活用</li> <li>・ 生徒、家族、コミュニティに対するバイアスや偏見、差別の負の影響</li> <li>・ 異文化への感性とパースペクティブ</li> </ul>	
実践力	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 生徒の多様な背景や特質を理解する。</li> <li>・ 個々の生徒に応じた学習活動を計画して、実施する。</li> <li>・ 個人および集団の差異を尊重し、すべての生徒が公平な待遇を得られる学習環境を設定する。</li> <li>・ 個々の学習ニーズを把握し、障害や学習困難、英才など特別な学習ニーズを抱える生徒を教授するための方策を知る。</li> <li>・ すべての学習領域において、全生徒が高い目標を達成するための方策を認識し、実施する。</li> <li>・ 多様な背景、特質、能力を有する生徒の学習を促進させるために、ICT を活用する。</li> <li>・ 個々の生徒の学習を支援するために保護者と協力し、コミュニケーションを行う方法を認識する。</li> <li>・ 自分自身の多様性に対する技能と実践力を評価し、これを向上させるための方法を明確にする。</li> </ul>	
価値	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 多様性を尊重し、積極的に対応する。</li> <li>・ すべての生徒とその保護者、コミュニティを尊重し、共感し、信頼関係を築く。</li> <li>・ 生徒の学業への取り組みやその成果は複数の要因に影響されるとともに、生徒には固有の能力や長所があることを認識する。</li> <li>・ 生徒がカリキュラムに公正にアクセスできるようにする。</li> </ul>	

スタンダード 5		生徒の学習を構造的に評価し、成果を通知する。
知識	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 様々な評価技術の特徴、活用方法、利点と欠点、</li> <li>・ 評価基準を明確にし、それを向上させる方法と、適切に通知する方法</li> <li>・ 妥当性、公平性、柔軟性のある信頼できる評価の原則</li> <li>・ 評価と成績通知に関する学校や採用機関、行政当局の政策とその手続き</li> <li>・ 評価と成績通知における倫理的責任</li> <li>・ 学習を評価し、教授と評価活動を検討するためのデータの活用方法</li> <li>・ 生徒の学習を管理し、評価するための ICT の活用方法</li> <li>・ 評価の質を保証する方法</li> <li>・ 形成的評価、総括的評価、記述的評価など多様な評価方法の利点と欠点、</li> <li>・ 継続中の学習を反映した評価とその通知方法</li> </ul>	
実践力	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 政策やカリキュラムの枠組み、生徒の期待やニーズなどに対応した学習目標と評価の条件を確立する。</li> <li>・ 同僚、生徒、保護者と学習目標や評価について協議する。</li> <li>・ 生徒の学習を評価するために幅広い資料を活用し、情報を収集する。</li> <li>・ 生徒の学習に対してフィードバックを行う。</li> <li>・ 生徒に適した支援方法や評価方法を採用し、生徒が異なった方法で学習を進められるようにする。</li> <li>・ ICT の活用を含め、学習を効果的にモニターし、評価し、記録する。</li> <li>・ 保護者等に生徒の学習状況を適切に通知する。</li> <li>・ 評価の資料や情報、指導計画や教授活動、評価とその通知に活用するための方法を確立する。</li> <li>・ 共通試験のような評価の質保証プロセスへの参加方法を知る。</li> </ul>	
価値	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 学習を評価するとともに、<u>学習のために</u>（下線筆者）評価する。</li> <li>・ 生徒の長所や短所の発見を学習の好機と捉える。</li> <li>・ 倫理に基づいた評価活動を行い、評価に関わる情報の守秘義務を遵守する。</li> <li>・ 同僚と協働で（教育の：筆者註）質の保証に取り組む。</li> </ul>	

スタンダード 6		個人の成長と社会参加を支援する。
知識	<ul style="list-style-type: none"> <li>各教育段階における生徒の特質とニーズ</li> <li>生徒の学習スタイル、興味、過去の学習体験や生活経験を把握する方法</li> <li>生徒が、個人のアイデンティティやプラスのイメージ、健康と福利、他者との健全な関係、共感する心を発達させるための支援方法</li> <li>青少年が、個人の成長、卒業後の進路選択、健康、ライフスタイル、人間関係などの問題について議論する方法</li> <li>グローバル化、労働、教育、余暇などに見られる変化が、卒業後の進路選択に及ぼす影響</li> <li>教育、訓練、労働、余暇、生涯学習を含めた若者の学校後の進路選択</li> <li>学校外の世界とつなぐ ICT の可能性</li> <li>学校、企業、高等教育機関、コミュニティ関係機関を含めた学習パートナーシップ</li> <li>積極的な市民性を促進する方法</li> <li>倫理および職務態度、プライバシー、守秘義務およびパストラルケアに関する政策</li> </ul>	
実践力	<ul style="list-style-type: none"> <li>生徒に関わる情報を把握し、それを活用して学習目標を設定し、個人の発達と社会参加を促す。</li> <li>生徒が、アイデンティティ、価値、自尊感情、健康と福利、他者との健全な関係、共感する心などを発達させるために必要な支援方法を積極的に認識し、その活用方法を知る。</li> <li>積極的な態度、能動的な市民性、生涯学習を促進し、学校と実社会を繋ぐ方法と、それを活用する方法を知る。</li> <li>生徒が仕事や余暇、学習の目標を設定するための支援方法を知る。</li> <li>生徒が学校外の活動に参加する経験を提供する方法を知る。</li> <li>学校、ビジネスや産業社会、コミュニティなどとのパートナーシップの構築方法について知る。</li> <li>生徒が多様なコミュニケーション方法を意図的に活用し、地域、国、世界のコミュニティに参加する機会を提供する方法を知る。</li> <li>生徒へのパストラルケアを行う上での教員の役割と責任を知る。</li> <li>課外活動に参加して、貢献する。</li> </ul>	
価値	<ul style="list-style-type: none"> <li>生徒の社会的、情緒的、身体的発達を促す。</li> <li>倫理に基づいて、生徒の保護者やコミュニティとの関係を維持する。</li> <li>生徒が積極的かつ十分な社会参加ができるようなパートナーシップを構築する。</li> </ul>	

スタンダード 7		安心感のある、支援的な学習環境を設定し、維持する。
知識	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 態度や行動の指導、安全で支援的な学習環境に関する政策や法律に関する知識</li> <li>・ 各学習段階における青少年の発達についての最近の理論や研究</li> <li>・ 態度・行動の指導の原則と方法</li> <li>・ コミュニケーション、時間の処理、葛藤処理、協議技術</li> <li>・ 教室環境が生徒の学習や行動に及ぼす影響</li> <li>・ 個人および集団の学習を計画し、実施し、評価するとともに、教材や科学技術を効果的に使用する技術</li> <li>・ すべての生徒を学習活動に参加させるための様々な技術</li> <li>・ 生徒の学習、態度、および福利に関する助言の資料</li> </ul>	
実践力	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 安心できる学習環境を設定して、生徒を支援し、学習に対して前向きに取り組む態度が養えるような関係を築く。</li> <li>・ 生徒の学習態度に対する明確な目標を設定し、適切な態度を促すためのフィードバックを行う。</li> <li>・ 態度・行動の指導および生徒の安全に関する政策とその手続きを（実践に：筆者註）適用する方法を知る</li> <li>・ 公平で、適切な配慮がなされ、言行が一致した指導を継続的に行い、助言を得る適切な時機についても知る。</li> <li>・ 他者に対する自らの責任を受け止め、適切に対応することを生徒にわかりやすく教える。</li> <li>・ 学習への取り組みを促し、安全で支援的な学習環境を設定するために、時間や場所、教材を効果的に活用する。</li> <li>・ 個人および集団の活動を把握し、どのような生徒も学習に参加できる方法を取り入れる。</li> </ul>	
価値	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 安全で支援的、かつ刺激のある学習環境を設定する。</li> <li>・ 生徒が積極的に学習に取り組む雰囲気を教室内につくり、学校全体でそれを維持する。</li> <li>・ 参加民主主義の価値を示す学習環境を設定する。</li> </ul>	

スタンダード 8 家庭やコミュニティとの生産的な関係を積極的に構築する。	
知識	<ul style="list-style-type: none"> <li>・生徒や家族、保護者、コミュニティの文化的、社会的、経済的特質や要望</li> <li>・生徒のニーズへの対応に向けて保護者が参加することの重要性の理解と参加方法に関する知識</li> <li>・コミュニティにおける学校の役割</li> <li>・学校と家庭との効果的な対話の特質とそれが教授・学習に与える効果についての知識</li> <li>・家庭やコミュニティとのパートナーシップを維持、向上させ、効果的に対応するための方法</li> <li>・学習プログラムの開発と実施、見直しなどに家庭やコミュニティを参加させる方法</li> <li>・コミュニティを基盤とした学習活動に生徒を参加させる方法</li> <li>・学校目標を、家庭やコミュニティに広げる方法</li> <li>・意思決定や生徒の福利において利害関係者と協働することの重要性と、生徒や家庭のプライバシー保持の重要性</li> </ul>
実践力	<ul style="list-style-type: none"> <li>・生徒の学習と福利を支援するために、家族や保護者、コミュニティの人々に敬意を払い、協力関係を築く</li> <li>・保護者などとの効果的なコミュニケーションを行うために、ICT を含む多様な方法を活用し、協働性を高め、学校のプログラムへの参加を促す。</li> <li>・保護者の関心、価値、優先事項や、多様な文化やコミュニティを承認した学習環境を確立する方法を知り、活用する。</li> <li>・保護者、コミュニティの人々の技能や人的資源を学習活動に取り込む。</li> <li>・生徒にとって意味のある学習体験を計画、実施し家庭やコミュニティの中で培われた知識や技能をさらに伸ばす。</li> <li>・教育、学校、教職の価値を家族、保護者、地域に推し進める方途を知り、適用する。</li> </ul>
価値	<ul style="list-style-type: none"> <li>・生徒の教育に関して、保護者やコミュニティの中心的役割を担う。</li> <li>・生徒の福利を促進し、保護者と協働で学業達成の多様な機会を生徒に提供する。</li> <li>・保護者やコミュニティと協働で、生徒の学習を向上させる。</li> </ul>

スタンダード 9		教職集団に積極的かつ効果的に参加し、貢献する。
知識	<ul style="list-style-type: none"> <li>・教育において教員が集団として活動することの重要性</li> <li>・個人としての目標を設定する技術</li> <li>・コミュニケーション、交渉、時間の処理、葛藤処理、問題解決能力</li> <li>・集団の原動力</li> <li>・効果的な集団を構成する人材の特質</li> <li>・高い業績を挙げる集団の特質</li> <li>・学校を基盤とする教職集団の役割と責任</li> <li>・生徒の学習を支援する専門家などによる支援</li> <li>・集団の業績を見直す力</li> </ul>	
実践力	<ul style="list-style-type: none"> <li>・個人としての職務目標を設定し、優先事項を確認する。</li> <li>・個人の技能、職務に関する専門的力量、および責任範囲に従って職務集団に参加する。</li> <li>・教員、専門家、専門家に準ずる人材、補助教員、その他の関係者と協力して生徒の学習プログラムを計画、実施、評価する。</li> <li>・職務上のコミュニケーションのために ICT を活用する。</li> <li>・教職集団の活動の見直しに貢献する。</li> </ul>	
価値	<ul style="list-style-type: none"> <li>・教授・学習活動を向上させるための同僚性を確立し、維持する。</li> <li>・職務集団の一員として、積極的かつ責任を持って活動に参加する。</li> <li>・意思決定に参加する。</li> </ul>	

スタンダード10		反省的な実践と継続的な職能成長に専心する。
知識	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 現代社会における教員の変化する役割</li> <li>・ 学校および当局の政策と説明責任</li> <li>・ 生徒保護に関する職務上の法的および倫理的な責任と義務</li> <li>・ QCTにより設定された教職のためのスタンダードとアカウントビリティ</li> <li>・ 教師の専門職性に関する最新の研究</li> <li>・ 職務に関する自己の学習と自己評価、自己の向上を支援するための ICT 等の活用方法、教育研究へのアクセス方法、学習コミュニティや教職ネットワークへの貢献方法</li> <li>・ メンタリングなどの指導技術</li> <li>・ 職能成長の支援 ネットワーク</li> <li>・ 反省的な実践と生涯学習の方法</li> </ul>	
実践力	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 自己の教育活動を批判的に省察する。</li> <li>・ 教職スタンダードを用いて自分自身の職務に関する長所、短所を分析し、職務目標を設定する、</li> <li>・ QCT が示す職務要求や倫理要求に適合しているか否かを評価する。</li> <li>・ 教授活動その他の業績を向上させる研修機会を知り、参加方法を知る。</li> <li>・ 学習コミュニティの教職ネットワークを知り、アクセスする。</li> <li>・ 政策や法的、倫理的義務に基づいて義務を遂行する。</li> <li>・ メンター活動や指導、その他の職務活動に積極的に参加する。</li> </ul>	
価値	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 法的かつ倫理的に職務に専念する。</li> <li>・ 職務を内省し、改善し、生涯学習に専念する。</li> <li>・ 同僚などと協働で職務を向上させる。</li> <li>・ 教職に対する社会の信頼を高める。</li> </ul>	

出典：Queensland College of Teachers (2006) *The Professional Standards for Queensland Teachers*.により筆者作成



資料5 クイーンズランド州の「教職専門性スタンダード」(2002年版)

<p>1 教員としての専門的知識および教科の知識の基盤を有し、それを実際に応用する能力</p> <p>1-1 急速に変化する社会環境の中での学習と教授活動の意味を理解する。</p> <p>1-2 上記の知識をカリキュラム、教授法、評価レポートなどに役立てる。</p> <p>1-3 上記の知識を創造し、応用し、さらに発展させる。</p> <p>1-4 学習環境の設定、提供、評価における教科横断的知識の位置づけを理解する。</p> <p>1-5 社会的、文化的、歴史的、政治的文脈の中での教育の位置づけを理解する。</p>
<p>2 教員という専門的職務に求められる幅広いリテラシーを有し、それを応用する能力</p> <p>2-1 言語およびニューメラシーに関して高度な技能を有する。</p> <p>2-2 言語、言語学習、言語教育に関する理論を理解し、応用する。</p> <p>2-3 自らの教授活動に必要な教科のリテラシーを有する。</p> <p>2-4 社会的、文化的文脈における幅広いコミュニケーション能力を有する。</p> <p>2-5 複数のリテラシーに精通し、学習環境における情報通信技術に精通する。</p>
<p>3 生徒を引きつけて知的好奇心をかきたてるとともに、支援的な学習環境を作り出す能力</p> <p>3-1 教育学、カリキュラムおよび評価の知識と技術をすべての生徒に応用する。</p> <p>3-2 生徒および学習に関する知識を有し、個人や集団にとって望ましい成果を促すような学習の機会を作り出す。</p> <p>3-3 社会的に公正でインクルーシブな学習環境をつくり、高度な思考と批判的探求心を促す。</p> <p>3-4 生徒の言語的、社会的、文化的な立場や、多様な能力、興味・関心を認識する。</p> <p>3-5 すべての生徒の学習を支援するよう努力する。</p>
<p>4 学校コミュニティ内外において、倫理に則った教育活動を行う上で必要な様々な人間関係の重要性を理解し、適切な関係を築く専門的能力</p> <p>4-1 学習共同体に積極的に関わり、人間関係を構築し、協力することの重要性を認識する。</p> <p>4-2 上記の人間関係には、生徒、保護者、同僚以外に、他の専門職員やサポート職員、地域関係者、教育分野以外の人材などとの関係も含まれる。</p> <p>4-3 実践共同体の中で互いに協議し、協力し、批評し合う関係を進んで受け入れる。</p>
<p>5 積極的に研鑽を積み、反省的態度で常に教員としての資質を高めようとする姿勢</p> <p>5-1 自らの教授・学習に積極的に取り組み、職能成長にとって実践の振り返りが重要であることを認識する。</p> <p>5-2 倫理的かつ社会的に公正な実践を行うために必要とされる多様な、また、時には矛盾を孕んだ価値を批判的に認識する。</p> <p>5-3 同僚性の中で自らの専門性を高め、生涯学習者としての自己を確立する。</p>

出典：Queensland Board of Teacher Registration, *Professional Standards for Graduates and Guidelines for Pre-service Teacher Education Programs*, pp.6-7 より筆者作成。

資料 6 クイーンズランド工科大学 2003 年版スタンダード  
(Teacher Practitioner Attributes :TPAs)

<p>1 生涯学習者としての素養と効果的な知識伝達能力</p> <p>1-1 様々な情報源から知識を収集し、形成し、それを批判する。(1,1-3, 2-1,2-3)</p> <p>1-2 生徒、教員、研究者の立場で実践や探求を通して、知識を追求する。(1,1-3)</p> <p>1-3 適切な情報技術を用いて情報を収集し、評価し、提示する。(2-5)</p> <p>1-4 幅広いリテラシーを有する。(2, 2-1,3,4,5)</p> <p>1-5 様々な手段を用いて効果的なコミュニケーションを行う。(2-4)</p> <p>1-6 問題解決および探求を基盤とする学習方法を採用する。(3,3-3)</p> <p>1-7 自らの学習を批判的に反省し、新たな情報や考えを生み出す。(5-1)</p> <p>1-8 明確な目的と目標を持って、自らの学習を管理する。(5-1)</p> <p>1-9 自らの学習の長所、短所を自己評価し、改善する。(5-1)</p>
<p>2 学習者を中心にしたインクルーシブな教育実践能力</p> <p>2-1 生徒の多様性を理解し、効果的に対応する。(3-4)</p> <p>2-2 心身共に安全が保障される心地よい学習環境を設定する。(3,3-3,3-4)</p> <p>2-3 すべての生徒の社会的成長を促す。(3-5)</p> <p>2-4 社会的公正と平等を促進する教授方法により、差別のない人間関係を構築する。(3-3)</p> <p>2-5 文化的、身体的、社会的、および行動心理学的な要因も考慮しながら、個々の生徒のニーズを明確にし、適切に対応する。(3-1,2,3,4,5)</p> <p>2-6 生徒が思考・学習スキルを発達させ、管理し、評価するための支援を行う。</p> <p>2-7 生徒の成長発達ニーズを理解し、実践に統合させる。</p> <p>2-8 教育の社会的、文化的要素を理解し、実践に統合する。(1-5,3-4)</p> <p>2-9 生徒を取り巻く家族やコミュニティと良好な関係を築く。</p> <p>2-10 言語、リテラシー、ニューメラシーの能力を常に向上させ、その能力を異文化間において適切に発揮することができる。</p>
<p>3 カリキュラム開発能力と思慮深い実践力</p> <p>3-1 効果的な学習環境を設定し、管理する。(1-4,3-3,3-5)</p> <p>3-2 個々の生徒や集団の学習経験とプログラムを計画する。(3-1,2,3,4,5)</p> <p>3-3 カリキュラム全般あるいは特定の分野の知識、技能を応用する。</p> <p>3-4 探求的、協働的、自主的な学習モデルを示す。</p> <p>3-5 情報技術を教授・学習活動に効果的に取り入れる。(2-5)</p> <p>3-6 現在の学習の場を越えて、広い世界と結びつけた学習環境を提供する。(4-2)</p> <p>3-7 継続的に自らの教授活動を振り返り、改善する。(5-1)</p> <p>3-8 理論に基づいた方法で、生徒の理解度や習得状況を評価する。</p> <p>3-9 法令上の教育政策を理解し、実践に盛り込む。</p> <p>3-10 最善の教育理論と実践を統合させる。</p>
<p>4 教育専門職としての自覚と、倫理および法に則った職務態度</p> <p>4-1 倫理的枠組みの範囲を越えずに、法に基づいた責任ある実践を行う。(5-2)</p> <p>4-2 法の範囲内において、多様性、社会的公正および統合の問題に取り組む。(3-3)</p> <p>4-3 様々な役割を担って教職関係者のコミュニティに貢献する。(4-1,4-2)</p> <p>4-4 職業上の権利と義務を尊重し、促進する。</p> <p>4-5 生徒、同僚、保護者、コミュニティ、政府、関係機関との連携を重視する。(4-1,4-2,4-3,5-3)</p>

出典：Queensland University of Technology, *Pathways to A Professional Portfolio*, pp.16-17  
により筆者作成。( )内は関連する「教員養成スタンダード(2002年版)」の項目。

資料 7 クイーンズランド工科大学 2005 年版スタンダード  
(Educational Practitioner Attributes :EPAs)

<p>A 反省的実践と効果的なコミュニケーション能力</p> <p>A-1 多様な情報源から知識を収集あるいは形成し、それを批判的に検討する。(1-1,1-2,1-4,2-3,2-2)</p> <p>A-2 言語とその学習、および教授法についての様々な理論を理解し、応用する。</p> <p>A-3 科学技術を適切に駆使して情報を収集し、それを評価して提示し、幅広いリテラシーとニューメラシーを発揮する。(2-1,1-3,1-4,5-1)</p> <p>A-4 学識ある教育者かつ研究者として、自己および他者の学習に、問題解決学習や探求に基づいた学習を取り入れる。(1-2,1-3,1-4,5-1)</p> <p>A-5 実践に対する省察を重視し、自らの学習と教授活動に積極的に取り組み、省察により倫理的かつ社会的に公正な教授実践を促進し、多様で時に対立する価値を批判的に認識する。(1-5,5-1)</p>
<p>B 生徒を中心にすえたインクルーシブな教育実践能力</p> <p>B-1 生徒の多様な学習ニーズに対応した学習環境を設定して、教育効果を高める。(3-1,3-2,3-3,3-4)</p> <p>B-2 社会的、文化的に多様な文脈の中で、コミュニケーション能力を発揮する。(2-4)</p> <p>B-3 教育の社会的、文化的文脈の中で、生徒が自らの思考および学習のスキルを向上させることができるように、生徒の学習を観察して、管理し、評価し、支援する。(1-1,1-2,3-1,3-2,3-4)</p> <p>B-4 学習の手助けとなる情報通信技術を活用して、社会的に公正でインクルーシブな学習機会を提供し、高度な思考と批判的探求を促進させる。(2-5,3-3)</p> <p>B-5 学習コミュニティにおける関係性や連携の重要性を理解し、自らもコミュニティに積極的に関与し、教員、生徒、保護者、他の専門家やサポート職員、地域の人材などとの関係を深める。(4-1)</p>
<p>C カリキュラム開発能力</p> <p>C-1 教授、カリキュラム、評価等に関する知識と技能を生かして学習プログラムを作り、すべての生徒の多様な能力と興味、関心に適切に対応する。(3-1,3-4)</p> <p>C-2 探求的学習、協働学習、個別学習のモデルを示し、学習を促す。(1-2,1-3,2-3,3-2,3-3)</p> <p>C-3 授業の目的に合った多様な教授方法を取り入れる。(3-2,3-3,1,2,3,1,3)</p> <p>C-4 成果目標に基づく評価基準を設定し、理論的かつ説明責任を果たせる方法で生徒の学習状況を把握し、適切に評価する。</p>
<p>D 専門職としての教育者</p> <p>D-1 法的かつ倫理的枠組みの中で、多様性、社会的公正、インクルージョンを尊重し、促進する。(3.4,4.1,5.1)</p> <p>D-2 実践の場において相談や協働体制、批判的関係を構築する。(4-.2)</p> <p>D-3 自己の職能開発とキャリア管理に責任を持つ。(5-2)</p> <p>D-4 教育者はリーダーであるとともに学習者であることを認識し、生徒とともに学ぶことに専念し、ロールモデルを示す。(5-2)</p>

出典：Queensland University of Technology, *Pathways to A Professional Portfolio*, pp.16-17  
により筆者作成。( )内は関連する「教員養成スタンダード(2002年版)」の項目。

資料8 ジェームズ・クック大学のスタンダード  
(Graduate Qualities)

<p>1 知識豊かな生涯学習者</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ グローバルな情報源から知識を習得し、評価し、教授・学習に適合させる。(1-1,1-2,1-3)</li> <li>・ 批判的、論理的かつ明晰で創造的な思考、発話、記述ができる。(2-4)</li> <li>・ カリキュラムの中で生徒のリテラシーとニューメラシーを向上させる。(2-1,2-1.2-3)</li> <li>・ 率直かつ寛大であり、探求心に富む。(2-4,2-5)</li> <li>・ 情報検索、評価、およびプレゼンテーションにおいて情報通信技術を活用する。</li> <li>・ 自らの知識を新たな状況に適合させる。</li> <li>・ 生涯学習に専念する。(5-1,5-3)</li> <li>・ 学識ある教員にふさわしい知識を有し、学習や研究に幅広い興味・関心を有する。(1-1)</li> </ul>
<p>2 すべての学習者とコミュニティへの専心</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 生徒を理解し、適切な指導を行い、良好な関係を築く。(3-4)</li> <li>・ 異文化関係の中で有効な関係を築く。(3-4,4-2)</li> <li>・ 遠隔地や先住民コミュニティを多く抱える北部クイーンズランド地方のニーズを重視して、生徒やその家族、コミュニティとともに効果的に職務を遂行する。(4-1,4-2)</li> <li>・ 性、人種、その他のあらゆる差別を排した実践を行う。(3-3,3-4.3-5)</li> <li>・ ジェンダー、人種、民族的背景、年齢、能力、学習スタイル、態度や行動、社会的状況、文化等を考慮に入れ、多様な学習ニーズを把握し、尊重し、適切に対応する。(3-3,3-4.3-5)</li> <li>・ 生徒の発達成長と学校教育の社会的文脈に関する知識を通し、個々の生徒のニーズを理解する。(3-2,3-3)</li> </ul>
<p>3 カリキュラム、教授法、評価に関する能力</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 有効な教育理論や研究成果に基づいた実践を行う。(3-1)</li> <li>・ 職務状況に適したカリキュラム、教授方針および実践方法を理解し、検討し、批判して適用する。(3-1,3-2,3-3)</li> <li>・ 人を引きつける効果的な学習体験とプログラムを構成し、計画する。(3-2)</li> <li>・ 生徒の学習を促進する学習環境を効果的に管理する。(3-2)</li> <li>・ 教授・学習において情報通信技術を活用する。(2-5)</li> <li>・ 探求心を持ち、他と協力して、自律的に学習するモデルを示す。(3-3)</li> <li>・ 生徒の発達や向上を観察して管理し、学習を促進させる。(3-2)</li> <li>・ 実践を批判的に反省し、常に計画性を持って改善する。(5-1)</li> </ul>
<p>4 教職への専念と、倫理的かつ責任ある行動</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ チームで効果的な職務を行う。(4-1,4-2)</li> <li>・ 職務およびコミュニティの問題を批判的に内省する。(4-3)</li> <li>・ 研究分野、カリキュラム分野の知識、幅広い一般教養とともに、授業における自らの役割にとって有用な探求方法を開発して、実践する。(1-3,5-3)</li> <li>・ 教員としての職務および職務上の人間関係において、社会的公正とインクルージョンを促進する。(3-3,4-1,4-2)</li> <li>・ 職務関係のコミュニティや学問分野のコミュニティに積極的に参加し、貢献する。</li> <li>・ 倫理に則って活動する。(4-1,4-2)</li> <li>・ 職務に関わる価値、倫理規約、法的役割や責任などに精通し、職務上の権利と義務の質を高める。</li> </ul>

出典：James Cook University, School of Education, *Graduate Qualities* により筆者作成。

( ) 内は関連する「教員養成スタンダード(2002年版)」の項目。

資料9 各行政区における都市部・農村部・遠隔地域の州立学校数（2006年）

地方教育行政区	地区教育行政区	計	都市部	農村部	遠隔地
ダーリングダウン ズ・サウスウエスト	ローマ地区	42	0	5	37
	ダウンズ地区	43	0	38	5
	トゥーンバ地区	48	30	18	0
	ワーウィック地区	41	0	35	6
ファーノースクイーンズランド	ケアンズ臨海地区	46	22	16	8
	テーブルランド・ジョンストン地区	48	0	41	7
	トレス海峡・ケープ地区	23	0	0	23
フィッツロイ・セントラルウエストクイーンズランド	セントラルコースト地区	56	23	30	3
	セントラルクイーンズランド地区	40	9	24	7
	セントラルウエスト地区	26	0	0	26
グレーターブリスベン	ブリスベンセントラルウエスト地区	49	49	0	0
	ブリスベンノース地区	53	53	0	0
	ブリスベンサウス地区	58	57	1	0
	ノースイーストブリスベン地区	55	52	3	0
マッカイ・ウィットサンデー	マッカイ・ウィットサンデー地区	74	19	29	26
モートン	モートンイースト地区	48	36	12	0
	モートンウエスト地区	55	23	32	0
ノースクイーンズランド	マウントアイサ地区	21	0	0	21
	タウンズビル地区	78	33	38	7
サウスコースト	ゴールドコースト地区	59	54	5	0
	ローガン/アルモント/ボーデヘル地区	53	43	10	0
サンシャインコースト	サンシャインコーストノース地区	60	33	27	0
	サンシャインコーストサウス地区	55	50	5	0
ワイドベイ・バーネット	ワイドベイノース地区	49	19	29	1
	ワイドベイサウス地区	54	9	45	0
	ワイドベイウエスト地区	42	0	39	3
合計		1,276	614	482	180

出典：Department of Education, Training and the Arts, *Rural and Remote Education Framework for Action 2006-2008*により筆者作成。

## 資料 10 学生の履修事例

本資料は、グリフィス大学の教員養成プログラムで教員資格を取得した学生の履修事例である。本研究では 3 つの大学のカリキュラムを事例とし、その構成と履修内容について考察したが、学生が実際にどのような履修をしているかについての検討は行っていない。そこで、3 つの大学のうち、グリフィス大学の中等教員養成プログラムで 2006 年に教員資格を取得した男子学生（以下、Alex [仮名]）<sup>1</sup>の事例を資料として記すこととする。

Alex は大学に入学するまでは自分自身の教育的ニーズを意識することもなければ、他者のニーズに対して関心を示すこともなかったと語っている。しかし、グリフィス大学の教員養成プログラムで履修する中で、個々の生徒には異なる教育的ニーズがあり、教員がそれらのニーズに対応することがきわめて重要であることを強く認識するようになっていった。特に、教育実習などの実践体験を通してその認識を強めていった<sup>2</sup>。Alex は自身のポートフォリオのテーマを「多様性への対応」とし、教育実習では特に授業における多様性への対応に焦点を当てている。こうしたことから、Alex の事例は教員養成プログラムの中で学生が何を、どのように修得し、学校教育における多様性に対応するための資質・能力をどのように形成されているかを把握するための有意義な事例だと考える。

記述は以下の流れで行う。まず、グリフィス大学のカリキュラムの中で、多様性を主要テーマとする科目で Alex がどのような履修を行っているかについて記述する。グリフィス大学では、「差異に対応する授業」が多様性を包括的に扱っており、教育的ニーズへの対応について幅広い側面から履修されていることは本文の中でも記述した。そこで、同科目の中で Alex が作成したレポート類を分析し、Alex の「学びの軌跡」を追うこととする。次に、教育実習ではどのような学習が行われているかについて考察する。特に、理論と実践の統合という観点から、「差異に対応する授業」との関係に焦点を当て、同科目で履修した理論を Alex が教育実習でどのように検証していったかについて記述する。最後に、カリキュラム全体を通して Alex が多様性に対してどのように認識を深めていったかについて記述し、グリフィス大学の教員養成プログラムが Alex にとってどのような意義を有しているかを検

---

<sup>1</sup> Alex は、クイーンズランド州南西部、ダーリング・タウンズ地方の白人家庭に生まれ、地元の州立中等学校を卒業したあと、ニューサウスウェールズ州の大学の人文学部に入学して心理学を専攻し、3 年後優等学位(Honors)を取得した。卒業後は 3 年間企業に勤務したが、その後、同州にある他の大学に再入学し、文学と歴史学を専攻した。同時に教育学のディプロマコースにも在籍した。第 1 学年終了と同時にクイーンズランド州にもどり、グリフィス大学に編入学した。グリフィス大学では人文学と教育学の 2 つの学位を同時に取得する(double-degree)コースに在籍し、人文学の分野では文学と歴史学を専攻し、教育学では中等教員養成コースに在籍した。卒業後の現在はブリスベン市内の州立中等学校で教職に就いており、英語と社会を担当している。A は学業に従事する一方で様々なボランティア活動も行った。また、日本文化には特に興味を示し、日本語を独学で学習しており、いずれは日本語の教授資格も取得しようと考えている。さらに、2005 年には日本企業の招聘による 3 週間の日本研修旅行に参加し、研修の一環として関東地方の公立中学校を訪問し、授業参観や生徒との交流を行うと共に、オーストラリアについての授業も行った。

<sup>2</sup> インタビューは 2006 年 8 月 29 日のほか数回実施した。

討する。なお、科目の履修については、Alex が作成したレポートを分析資料として使用し、教育実習およびプログラム全般についてはポートフォリオを使用する。ポートフォリオは学生がプログラムを通して自らの学習およびその成果を記録するものであり、教育実習に関する記録は特に重視されているものである。それゆえ、ポートフォリオには養成段階の履修が「凝縮」されており、履修の「軌跡」を考察するための有効な資料だと考える。

## 1 授業科目における履修

ここでは、「差異に対応する授業」の中で Alex が作成した小レポートおよび小論文を用いて履修の様子を考察する。Alex の小レポートは以下のテーマで記述されている。

- 第1週 ① 家庭の多様な背景が授業に及ぼす影響  
② 教育の成果に影響を及ぼす要素
- 第2週 ① 教育現場において生徒を属性によって分類することの問題点  
② 教育を受ける権利と義務
- 第3週 ① 「個別教育計画」における生徒と教員の役割  
② 協働的な学習における相互依存
- 第4週 ① プロセスを重視した指導と生徒間の「学び合い」  
② 機能性を重視した態度行動の評価
- 第5週 ① 信頼性のある評価  
② 複数の手段（筆記、視覚、口頭など）を用いた評価
- 第6週 ① ニューメラシーに問題を生じさせる原因となるもの  
② 学習困難を抱える生徒のニューメラシー
- 第7週 ① 英語を母語としない生徒の数学に対する意識  
② 英語を母語としない生徒に対する教員の認識
- 第8週 ① 学校コミュニティにおける協働の「架け橋」  
② 重い聴覚障害を抱える生徒とのコミュニケーション

レポートには、授業で学習した理論の概要や批判的考察、Alex 自身の体験、チュートリアル議論に対する Alex の意見などが記されている。授業で扱われた幅広いテーマが取り上げられており、Alex が多様性の様々な側面について履修していることがわかる。さらに、回を重ねるごとにレポートの内容に変化が見られ、単に知識を習得するだけでなく、授業を通して自分自身の理論を構築していく様子が見られる。たとえば、授業開始直後のレポートでは以下のようにテキストをそのまま抜粋したり、要約したりしたものが多い。

家庭における体験は様々なことに影響を及ぼしている。たとえば、家庭の崩壊（離婚など）、文化や人種の問題、経済的事情、性的志向などが例として挙げられるが、個性、ジェンダー、民族的あるいは人種的背景、地理的条件などと同様に家庭の状況は教育にプラスの影響もマイナスの影響も及ぼす可能性がある（第1週）

（テキストの中で：筆者註）アシュマンとエルキンスは以下のように述べている。 固

定的な見方というのは、生徒の中で継続されることが多く、時に、一生続くこともある。また、他者の固定的な見方によって自尊心や自己達成感が阻害されたりすることがある。たとえば、自分はいつもないがしろにされているという感覚を生徒に持たせたり、目標を達成するのは無理だと感じさせたり、また、相手が固定的な見方をするから自分は不適切な態度を示すのだと言い訳をさせたりすることがある。その結果、生徒は努力して何かを達成しようとする気持ちを失っていく。(第2週)

しかし、第3週の協働学習に関するレポートでは、効果的なグループ学習を行うためには明確な役割分担が重要であることを理解したことなど<sup>3</sup>、体験を通して自らが学習したことが記されている。また、第5週の学習評価に関するレポートでも、同じ題材やテキストを用いても教材や教具が違くと生徒の学習効果に差が生じることを確認したことが報告されている<sup>4</sup>。

協働学習とは生徒が小グループで同じ目標に向かって学習することである。このような学習は学業の達成を促進し、積極的な態度や自己肯定感、さらに、障害のある生徒を積極的に受け入れようとする態度を養う。私(Alexのこと：筆者註、以下同様)は特別な教育的ニーズを抱える生徒がいるクラスで実際にこの協働学習を取り入れている授業を参観し、利点がたくさんあることを確認した。(第3週)

同じ教材や題材を生徒に与えても、種類や内容(印刷教材や映像など)が違えば、生徒の参加態度や理解度に大きな違いが見られることを教育実習での英語の授業で確認した。(第5週)

さらに、第7週のレポートでは英語を母語としない生徒への対応に関して記述しているが、自分自身が日本の学校で授業を参観した際に、学習言語が理解できない生徒の立場を少なからず体験することができ、理解が深められたことを以下のように述べている。

指導の仕方によっては、英語を母語としない生徒が数学で「成功のチャンス」をつかむことができる。数学で使われる記号は万国共通であり、(英語ができなくても：筆者注)彼らには記号そのものは理解できるからである。それゆえ、学習の達成は英語力だけに左右されるものではないと言える。(中略)ただし、生徒がどの国で生まれたかによって、数学の理解度は異なり、同じ学年でも国によってはオーストラリアの学校より高度なことを学んでいることもある。(中略)なお、これは私自身の体験であるが、日本での研修で現地の中学校の数学の授業を参観した。授業の内容は9年生レベルのものだったにも関わらず、(日本語が理解できないために：筆者註)私にはそれが非常に難しく感じられた(although

---

<sup>3</sup> レポートには、「グループ活動では各人の役割分担を明確にし、それぞれの役割をわかりやすく説明することが効果的であった。」と記されている。

<sup>4</sup> 「教育実習の英語の授業で、同じテキストを用いたり、同じテーマを取り上げたりしても、(プリントや視聴覚教材など)異なる学習媒体を用いると、生徒の授業への参加や理解の度合いに大きな違いが見られた。」と記されている。



this was the equivalent of our year 9, the level of difficulty was such that I could not even keep up) (第7週)。

以上のように、後半になるほどレポートに自らの体験を含めるようになっており、体験を省察しながら論を展開している様子が窺える。

一方、小論文は社会科の授業における英語を母語しない生徒への対応をテーマとしており、第8学年に在籍するアフガニスタン難民の生徒Kを想定した授業案を作成し、授業での対応方法について記述している。以下はその概要である。

Kは、入国当初は難民キャンプで生活し、キャンプ内の学校に通っていたが、数ヶ月前現在のコミュニティに転居し、地元の学校に通学するようになった。キャンプ内での学習が効果を発揮し、生活言語としての英語はかなり習得している。また、学校の授業にも前向きに取り組んでいる。しかし、学習言語の習得は不十分であり、特に、作文力が不足している。また、グループ活動にもやや消極的である。そのため、言語面の障害を取り除き、自信や自尊感情を高めることに重点を置いた授業案の作成が必要だと考える。また、授業ではKの文化的背景が尊重されるような状況を生み出すため少人数グループを構成し、Kにとって支援的な学習環境を作るように努めた。さらに英語のモデルとなるようなパートナーとペアを組ませ、英語力を向上させることもめざした。自分の考えを英語で表現する力をつけさせるため、Kにはまず母語で自分の考えをまとめてから英語に言い換えるよう助言し、時間も他の生徒より多く与えることにした。こうした取り組みはKの内省的思考を促し、また、教員である私自身がKの文化や母語を尊重していることをKに対して示すことにもなると考える<sup>5</sup>。

記述からは、学習言語が十分でない難民生徒の自尊感情を高めながら授業への参加を促すことが重要であると考えている様子が窺える。また、支援的な学習環境、生徒の教育的ニーズの把握、レベルに合わせたカリキュラムの改編、協働学習の促進、教育的ニーズに応じた個別学習プランの作成と実施、教員による生徒の言語や文化の尊重などの重要性も認識していることが推察できる。ちなみに、Alexが同小論文の添付資料として作成した授業案には、同科目だけでなく、カリキュラム研究の科目や3年次の教育実習などで修得された内容も含まれており、他の科目との統合が見られる。

なお、「差異に対応する授業」についてAlexは次のように述べている。「とても有意義な科目だと思う。S(担当教師：筆者註)も熱心で評判がいい。ただ、私はこの科目を履修する以前の3年次の教育実習で特別な教育的ニーズを有する生徒がたくさん在籍するクラスを担当し、また、特別支援教育ユニットでもボランティア活動を4週間行っているので、この科目で学習した内容の多くはすでに体験済みだった。だから、授業で特に目新しいことを学んだという印象は少ない。むしろ、体験したことを理論的に確認することが多かった<sup>6</sup>。」この言葉からは、Alexが同科目の履修を通して教育実習での実践を振り返り、理論

<sup>5</sup> Aの課題小論文 *Creating inclusive lessons for a refugee child with a non-English speaking background*, A Written Assignment for “Teaching to Difference”より引用。

<sup>6</sup> 筆者によるAlexへのインタビューより(2006年8月29日実施)。

との統合を図っている様子が推察できる。また、レポートや小論文の内容からは、同科目を履修することにより、教育実習での体験がインクルーシブ教育の様々な理論に統合されている様子が窺える。さらに、前記のように、週を追うごとにレポートの内容が単なる知識の羅列から自らの体験と結びつけたものへと変容していることから、そこでも実践の省察が行われていることが推察できよう。教育実習では小論文に付された授業案の有効性が検証されている<sup>7</sup>。こうしたことから、理論と実践を結びつけた履修が行われていることも推察できる。

## 2 教育実習における履修

### (1) 実習のスケジュール

Alex の実習スケジュールは表 1 のとおりである。最初の実習校である W 中等学校（以下、W 校）は、ブリスベンに近接するローガン市にある州立の中等学校である<sup>8</sup>。同校は低所得者の集住地域にあり、民族的マイノリティの生徒が多く在籍し、先住民生徒や南太平洋諸島出身の生徒も多い学校である。特別な教育的ニーズを抱える生徒も数多く在籍し、生徒指導上の問題を多く抱えるいわゆる「困難校」である。障害を抱える生徒のための特別支援教育ユニットがあり、通常クラスでの指導が困難で、個別指導が必要な場合は同ユニットの特別プログラムで指導が行われる。Alex は同校で正規の教育実習 5 週間行ったあと、「社会体験」を同ユニットで 4 週間行っている。

第 2 回目、および第 3 回目の実習はブリスベン市内にある B 中等学校（以下、B 校）で実施された<sup>9</sup>。B 校は州内でも有数の進学校であり、入学試験を実施する唯一の州立学校である<sup>10</sup>。また、生徒数は 2,000 人を超える大規模校である。W 校と B 校は、生徒の文化的多様性、家庭環境、学習能力などにおいて対照的な学校である。

表 1 Alex の教育実習スケジュール

年度・学期	教育実習	実習校	教科担当学年（教科名） / 担当学級
2005 年前期	教育実習 1（25 日）	W 校	第 8 学年（英語） / 第 8 学年
2005 年前期	社会体験（20 日）	W 校	特別支援教育ユニットでのボランティア
2005 年後期	教育実習 2（25 日）	B 校	第 10・11 学年（社会） / 第 12 学年
2006 年前期	教育実習 3（25 日）	B 校	第 10・12 学年（英語）、第 10 学年（社会） / 第 12 学年

出典：Alex の実習資料を基に筆者作成

<sup>7</sup> 小論文の指導案は架空のクラスを想定したものであるが、Alex は教育実習における英語を母語としない生徒への教科指導で、これを実際に使用している。

<sup>8</sup> 本論文の第 3 章で事例として取り上げた W 校と同一校である。

<sup>9</sup> グリフィス大学では、通常 3 回の教育実習は異なる学校で実施することになっているが、2 回目の実習で Alex の力量を認めた B 校の教員が、第 3 回目の実習も同校で実施することを大学に要請したからである。

<sup>10</sup> オーストラリアの州立学校では通常入学試験等は実施されない。

## (2) 授業観察

実習は授業観察、授業の計画立案と実施、省察が中心となっている。初期の実習では授業観察に多くの時間が取られ、次第に実習時間が増やされていく。第1回目のW校での実習でAlexは授業観察を26回行ったが、観察の視点は毎回明確にされている(表3)。

授業観察の記録からは、指導教員の教授法や授業の流れ、生徒の授業態度など、様々な観点から授業の観察が行われている様子が推察される。たとえば、第9回の観察後、「グループ活動はすべての生徒が活動内容を確実に理解してから始める必要がある。」と記している。また、第16回の観察では、「特別な支援を必要とする生徒を個別に支援するには、課題を難易度に応じて分割し、各段階で何をすればよいか分かるまで生徒に考えさせることが有効である。」と記しており、教育的ニーズを抱える生徒に個別支援を行うための効果的な方法を学習している様子が窺える。第17回と第19回の観察からは、複数の教員による協働授業では「キャッチボールのような」授業が効果的であることや、補助教員を活用して個別支援を行う方法などを学習している。さらに、第18回では、生徒の発言や態度・行動から生徒の情報を引き出し、それを指導に生かす方法について学習している。観察のあとは授業を担当した教員と意見交換を行い、さらに指導教員からも指導を受け、学習したことをその後の授業実習に反映させている。

表3 授業観察の重点項目

回	観察の焦点	学 年	時 間	回	観察の焦点	学 年	時 間
1	リテラシーとニューメラシーの課題	8	70	14	有効な表現方法と手本の示し方	11	70
2	学習態度の指導	8	70	15	活動に集中させる方法	8	70
3	題材の提示	12	70	16	教授テクニック	8	70
4	理解の把握と承認	8	70	17	ティームティーチング	8	70
5	添削と承認	8	70	18	教授方法	8	70
6	学習態度の指導	8	70	19	ティームティーチング	8	70
7	読解の指導	8	70	20	テストの実施	8	70
8	作文指導	8	35	21	教授方法―課題への取り組み	8	70
9	グループ活動の指示	8	35	22	学習の奨励と指導	10	70
10	討論の目的とその指導	12	70	23	表現と手本の示し方	8	70
11	添削指導	10	70	24	授業の雰囲気作りと効果	11	70
12	学習態度の指導	8	70	25	教授テクニック	11	70
13	学習方法	8	70	26	授業における生徒の掌握と指導	8	70

出典：Aの実習資料を基に筆者作成

## (3) 授業実習

3年次には、前期(W校)と後期(B校)の2回実習が行われているが、それぞれ30回程度の授業実習が実施されている。Alexはこの年度はポートフォリオのテーマを「多様な教育的ニーズへの対応」と設定し、その理由を以下のように記述している。

教育省は、州立学校に在籍するすべての生徒が公正な教育を受けられることをめざす取り組みを行っているが、学校では教員もまたすべての生徒に公平に対応し、公正な指導を行わねばならない。しかし、学校には多様な生徒が在籍しており、これを一律に実現するのは現実として非常に困難である、そのため、教員は個々の生徒に適した指導計画を意図的に立案し、これを実施する必要がある。(中略) それゆえ、生徒の多様性への認識および効果的な教授活動を本ポートフォリオの最重要課題として設定する<sup>11</sup>。

Alex は、公正な指導を行うためには、教員が多様性に対応した授業を意図的に行う必要があると考え、大学の授業で履修した様々な理論を応用して、①インクルージョンを促進する教室の座席配置、②学習への動機づけと学習態度の指導、③個々の生徒の「差異」への対応の3点に焦点を当てた授業実習を行い、以下のように理論の検証を行った。

#### 1) インクルージョンを促進するための教室の座席配置

Alex は、B校の第11年生のクラスの中に、いつも特定の場所に固まって座り、授業への意欲をあまり示さない生徒が数名いることに気がついた。そこで、指導教員と相談し、それまで黒板に平行して設置されていた座席を図1のように馬蹄形に変更した。座席配置の変更は、Alex が実習前に大学の授業で学習したグランドウォーター＝スミスの理論を応用したものでもある。グランドウォーター＝スミスは、教室では生徒が自らをクラスの重要な一員であると認識することの重要性を指摘している。それによって、授業の中で生徒は互いに他者から共感や支援を得ていると感ずることができ、クラスとしてのまとまりを作り出すことが可能となるからである。そのためには、教員も生徒も「私たち (We)」や「私たちの(our)」などというインクルーシブなことばを意図的に使用し、また、生徒の間に生産的な(productive)関係性が作り出せるような座席配置にするのが効果的である<sup>12</sup>。

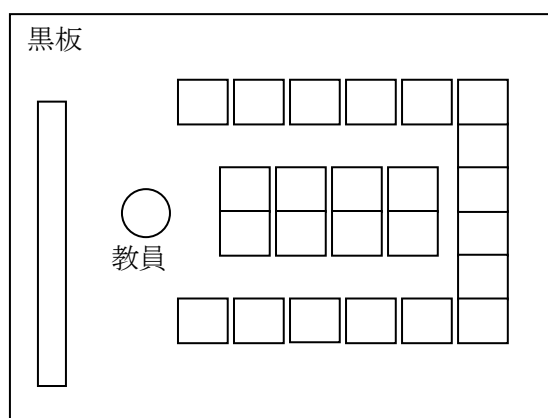


図1 馬蹄形の座席配置

<sup>11</sup> Alex のポートフォリオより。

<sup>12</sup> Groundwater-Smith, S., Ewing, R., and Le Cornu, R. (2003) *Teaching: Challenges and Dilemmas*, Thomson: Melbourne, p.127.

座席配置を変更した結果、Alexのクラスでは教員にとっての「死角」がなくなり、全員を見渡すことができるようになった。また、机間巡視もしやすくなった。さらに授業での対話が形式的ではなく、自然な形で行われるようになった。結果としてその後の授業では、それまで意欲を見せなかった生徒だけでなく、他の生徒も今まで以上に積極的に授業に参加するようになり、学習が促進されたと報告している<sup>13</sup>。意欲のない生徒への対応として実施した新たな座席配置がクラスの生徒の関係性を強め、全体の学習を促進させるという予期せぬ効果をも生み出したのである。

一方、W校での実習ではB校とは異なる座席配置が試みられている(図2)。同校でAlexが担当した第8学年のクラスは生徒数45名という大規模なクラスであり、そのうちの3分の2以上が学習その他の面で特別な教育的ニーズを有する生徒である。低学力の生徒が多い一方で、高い学力を有する生徒もあり、学力差は大きい。そのため、Alexは小グループに分けてグループ活動を行わせることが効果的であると判断した。また、各グループそれぞれに学力の高い生徒と低い生徒を混在させ、生徒が互いに教え合う状況を作り出そうと考えた。結果として、生徒の授業への参加姿勢が向上し、クラスのまとまりが強まるとともに、個々の生徒の意欲が高まったとAlexは報告している<sup>14</sup>。

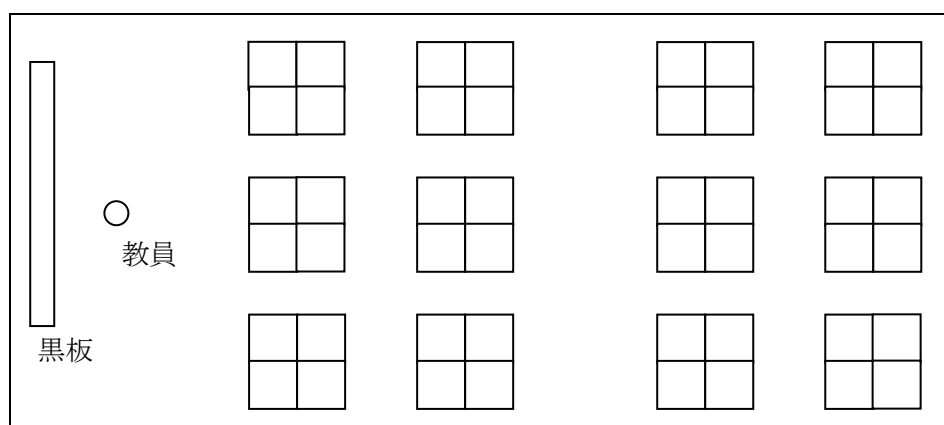


図2 小グループによる座席配置

## 2) 学習への動機づけと学習態度の指導

生徒の意欲と学習態度は密接な関係を有しており、学習態度を改善させるには、生徒が授業に参加したくなるような動機づけを十分に行う必要がある<sup>15</sup>。そのためには学習の目的を明確にし、責任と主体性を持たせて学習させること、生徒の興味・関心を刺激し、ときには通常とはかけ離れた大胆とも思える活動(risks)であってもこれを敢えて行い、実際的な価値を有する(relevant)カリキュラムを実施することが重要だとAlexは考えた。

そこで、B校での第11学年の英語の授業では、生徒自身に学習を管理させ、意欲をうな

<sup>13</sup> Alexのポートフォリオより。

<sup>14</sup> Alexのポートフォリオより。

<sup>15</sup> Groundwater-Smith, S. *et al. op.cit.*, p.126.

がし、学習態度に関わる問題を起こさせないようにしようと考えた。具体的には、授業の目標と目的を繰り返し生徒に伝え、これを明確に示した。さらに、学習を評価と直結させ、毎時間の授業は個別に切り離されたものではなく、一貫した単元学習であることを生徒に認識させるように努めた。また、生徒の興味・関心を絶えず刺激し、学習動機を高めるようにも努力した。評価と結びついたこうした学習活動は生徒の学習への取り組みを向上させる結果をもたらした。

一方、W校における第8学年の横断的学習でも、学習能力の多様な生徒たちが授業に関心を持てるよう、生徒が興味を持ちそうな題材や教材をできるだけ使用し、どの生徒にも理解できるような平易な授業を行うよう心がけた。その結果、Alexのクラスでは低学力の生徒が授業で取り残されるということが少なくなり、学習に興味を示し、積極的に参加する様子が見られるようになっていった。

### 3) 生徒の教育的ニーズへの対応

B校の英語の授業でAlexは学習スタイルに応じて柔軟に教材を選定することを試みた。また、生徒にも個々の興味・関心や能力に応じて教材や学習方法などを選択させた<sup>16</sup>。たとえば、作文を課した際に、Alexは手本となるテキストを示すにあたっては文化、対象とする年代、表現方法等において多様なテキストを準備し、それらを意図的に生徒に提示した。与えられたテキストではなく、多様なテキストの中から生徒が自らの興味・関心、能力に適したテキストを選択することが課題の効果を高めることにつながると考えたからである。結果として、生徒が提出した課題はAlexの期待以上のレベルとなり、また、Alexが提示しなかったならばおそらく生徒は接することがなかったであろうと思われるテキストからも多くの影響を受けていることが判明した。このことを証明する資料として、Alexはクラスの中で普段は目立つことがほとんどなく、孤立しがちだった女生徒が、他の生徒の手本となるようなレベルの高い作文を書いて皆の注目を集め、自信を持つようになった事例を紹介している<sup>17</sup>。

一方、W校では学習障害のある生徒が多く在籍するクラスで授業を行ったが、「たとえ軽い障害の生徒を対象とする授業であっても、効果を生み出すためには高度に構造化された授業が必要である」というマーシュ (Marsh)の理論<sup>18</sup>を用いて、授業を計画する際には常に特別な教育的ニーズを抱える生徒への対応を念頭に置いて計画をたて、彼らに対する配慮を行いながら授業を実施した。

このように、実習を通じてAlexは生徒の多様性に対応した効果的な授業を念頭において授業を計画した。また、教育的ニーズへの対応については、大学で学習した様々な理論の応用を試みており、それを授業の中で検証しながら、自分自身の教授方法を確立していることが推察できる。

<sup>16</sup> こうした学習方法をAlexは大学のカリキュラム研究の科目でも学習している。

<sup>17</sup> Alexの3年次のポートフォリオより。

<sup>18</sup> Marsh, C. (2000) "Providing for individual differences in learning", *Handbook for Beginning Teachers*, Ch.14, Longmans: Melbourne.

### 3 プログラム全体を通じた履修

Alex は、プログラムにおいて必要とされる単位を4年次の前期までにはほぼ取得していたため<sup>19</sup>、第3回目の教育実習では、ほぼ初任教員に近い立場で教育活動に参加した。課外活動の指導にも参加し、教員研修や職員会議、教科主任や専任教員の会合にも正規の教員に近い立場で参加している。その結果、指導教員以外の他の教員からも多くの助言を得ることができ、それが Alex の力量形成にとって有効であったことを、実習の2週目を終えた段階以下のように記している。

今回の実習では第10学年のクラスの生徒指導に困難を感じている。(中略) 実習では、その時々为学校状況や生徒のニーズによって生徒指導の方法も大きく影響されることを学んだ。すなわち、ある状況に適した教員の態度や方策が、他の状況にも適するとは限らないということである。この点に関しては、複数の教員から有益な助言を得ることができ、大変感謝している。(中略) これまでは、生徒が教育的ニーズを抱えているとき、そのニーズは一種類だと考えていた。しかし、生徒に対応するうちに、生徒の中には複数のニーズを抱える者もあり、多様な支援を必要としていることを学んだ。(中略) 生徒を形成的に評価することにより、次週以降は個々のニーズにもっと効果的に対応できると思う<sup>20</sup>。

実習の最終段階で受けた州教育省の能力審査<sup>21</sup>で、Alex は最も高い評定を得ている。また、実習校からは契約教員として採用したいという申し出を受けている。これらのことから、プログラムの修了時には、教職を目指す学生としては高い資質・能力を身につけていたことが推察できる。また、審査の際に Alex が提出したポートフォリオには4年間のプログラムを通して Alex がどのような資質・能力を習得し、何を重視しているかを把握することができる。たとえば、教職の意義および教員の役割については以下のように記している。

教員として私は、学ぶことの重要性を生徒に繰り返し伝えるとともに、意欲を高める学習環境を設定する方法を追求してきた。自分が果たすべき役割は、個々の生徒が学校や社会において批判的かつ創造的に問題を解決する能力の向上に向けて手助けをすることだと考える。(中略) すべての生徒が一様に達成すべき学習目標がある一方で、個々の生徒の興味・関心やニーズ、能力、学習動機、すでに習得した知識や過去の経験をもとに目標に到達する道程はすべて異なる。それゆえ、生徒の「差異」を理解し、尊重し、これを公正に評価しながら効果的な教授法を探求して彼らの学業を向上させ、公正とインクルージョンを実現させる義務が自分にはあると考えている。(中略) 教員としての私の目標は、すべての生徒が積極的に学業に従事し、その能力を高めることであり、また、生徒が学校

<sup>19</sup> グリフィス大学での Alex の単位には、他大学で取得した単位が算入されているため、Alex は通常よりも短い期間ですべての単位を取得し、4年次にはすでに教員登録も行った。

<sup>20</sup> Alex の実習中間報告書より。

<sup>21</sup> クイーンズランド州では、最終学年の教育実習終了時に州立学校の教員採用に向けた能力審査が行われ、その結果5段階の評定がつけられる。

や社会において自己実現をはかれるような資質や技能を習得し、生涯にわたって自らを上らせていくことができるよう有効な支援を行うことである<sup>22</sup>。

記述からは、Alex が公正な指導とはすべての生徒を同一に扱うことではないと考えており、個々の生徒に適した方法で、差異化をはかる必要があると考えていることが推察できる。しかし、Alex の学習プロセスからは、Alex が最初からこうした認識を持っていたわけではなく、教員養成課程での履修を通じて次第に生徒の「差異」を尊重し、個々の教育的ニーズに対応することの重要性を認識するようになっていったことが明らかになるであろう。その大きな要因となったのが、W 校で最初に教育実習を行った際に体験した特別な教育ニーズを抱える生徒たちの指導である。Alex はその時のことを以下のように述べている。

私はW校での実習の中で、知的障害、ADHD、アスペルガー自閉症などの特別な教育的ニーズに関わる貴重な経験をし、そこから多くのことを学んだ。そこでの実習は私自身の今後の教育活動やそれ以外の面においても非常に有意義な体験であったと感じている。実習の初日には、自分は本当に教職に向いているのだろうかという疑問を抱いていた。しかし、全9週間の実習を終えた今は、教職が私にとって間違いのない選択であると確信している<sup>23</sup>。

先述のように、W 校には州の中でも特に多様な民族的背景の生徒が在籍し、低所得家庭や失業家庭の割合が極めて高い学校である。そこでの試行錯誤の実践経験が Alex に多様な文化的背景、学習能力、学習態度などへの対応の重要性を実感させることにつながったと考えられる。一方、Alex は他の2回の実習を州の中で最も学力水準が高いと言われている学校で実施しており、あらゆる面において異なる環境にある二つの学校で実習を行ったことが、「差異」への対応について学ぶ上で非常に有意義であったと Alex は語っている<sup>24</sup>。また、生徒の学力が高いと言われる B 校においても、教育的ニーズは様々な面に見られることを知り、ニーズへの対応はどのような学校においても必要とされることを学んだ。

さらに、多様な背景や能力を有する生徒が在籍するクラスにおいて授業をどのように構成し、それをいかに効果的に実施するかということは、教員にとっての重要な課題であることも学習しており、これに関しては以下のように記している。

私は、授業を計画する際には生徒の多様性を重視し、常に多様性の価値を念頭において授業を行った。(中略) 生徒の異なる生活背景、知識、興味、リテラシーの能力などは学習上多くの問題を生じさせることがある。しかし、・・・生徒の多様性は一方で学習の重要な基盤となり、豊かで意味のある学習経験を作り出すものだと考える。それゆえ、実習では、個々の生徒の性格や特質を把握するように努め、彼らの知的好奇心を刺激するようなやりがいのある授業を計画するように努力した。(中略) 生徒がすでに獲得している知識や技能を、新たな学習に結びつけるための「足場」(scaffolding)として活用することによって、

<sup>22</sup> Alex のポートフォリオより。

<sup>23</sup> Alex が大学に提出した教育実習報告書(*Professional Experience Report*)より。

<sup>24</sup> 筆者による Alex へのインタビューより (2006年9月8日実施)。



彼らが学習の障害を乗り越えられるようにも努めた。(中略) 同ポートフォリオに添付した各種資料からは、教育の質、公正とインクルージョンを重視する私の姿勢が教授活動のあらゆる面に浸透していることが明らかになると確信している<sup>25</sup>。

生徒の教育的ニーズに対応した実践を行うことの重要性についてポートフォリオの中で Alex は繰り返し述べている。Alex 自身もそのために必要な能力の形成に努めており、多様性は学習の基盤だと考えている。多様性に対する Alex のそうした価値、理論、実践力の多くが教員養成プログラムの中で培われ、醸成されていったことは、ポートフォリオに添付した実践記録や、授業の資料、生徒の感想、指導教員の評価などの中に、多様性に関わるものが非常に多く含まれていることから明らかであろう<sup>26</sup>。たとえば資料は、文化的に多様な生徒が在籍するクラスで実施した生徒の民族的背景を取り入れた活動、生徒の興味関心や学習スタイル、学習能力の多様性に対応した授業案、生徒の背景を重視したインクルーシブな授業計画、半数以上の生徒が学習困難を抱えるクラスで授業を行った際に、生徒や指導教員から集めたフィードバックなど、半数以上が多様性や社会的公正に関わるものである<sup>27</sup>。このことから、カリキュラムを通して Alex が多様性への対応を通して社会的公正を推進するための資質・能力を、理論と実践の両面から修得していったことが明らかであろう。

---

<sup>25</sup> Alex のポートフォリオより。

<sup>26</sup> ポートフォリオには、プログラムでの習得を証明する資料の添付が求められており、実習の評価表、指導教員のコメント、生徒による授業評価、生徒の作文などがこれに含まれている。

<sup>27</sup> Alex は根拠を示す資料(evidence)として 27 種類の資料をポートフォリオに添付している。

